

念仏を称えるということ

住職 堤 俊翁

「南無阿弥陀仏と称えなさい」と法然上人は強くお念仏を勧められています。

無限のいのちと無限の智慧である「阿弥陀様」に心の底から、信順します。付き従います。ということが「南無阿弥陀仏」と念仏を称える意味です。

無限のいのちと無限の智慧を絶えず投げかけて下さる「阿弥陀様のお慈悲」も、それを感じ取ることができるかどうかは、こちらに求める心があるかどうかできまります。

これはテレビにたとえるとわかりやすいでしょう。私達がテレビの電源を切っているときでも、電波はつねに流れて流れてきています。テレビを見ようとするには電源を入れ、チャンネルをあわせなければ番組を見ることはできません。

テレビの電波のように、仏の慈悲は常に私達に注がれています。しかし、私達に求める気持ちが無ければ、救われるはずのものも救われません。どうか、みなさん御自身の道を求めて、御精進、お念仏にお進みいただきますようお願い申し上げます。

お盆法要のお知らせ

今年も次のようにお盆の法要を勤めます。
どうぞ御参詣下さい。

日時 8月13.14.15日

毎日午後5時より

無量寺本堂にて

受付で御回向の申し込みをして下さい。
各家御先祖様の御回向をいたします。

仏事のQ&A

Q もうすぐお盆が来ます。どうしてお盆といわれるのでしょうか。また、お盆の意味と、わたしたち浄土宗檀信徒にふさわしいお盆の迎え方について教えてください。

A お盆は、インドの言葉で「ウランバナ」、漢字で「盂蘭盆」と書きます。「逆さまに吊り下げられた」という意味です。『盂蘭盆経』にある説話から来ています。

お釈迦さまのお弟子の目連が神通力で、亡くなったお母さんがどこにいらっしゃるか、たどってみると、餓鬼道に落ちてやせ衰え、見るもあわれな姿になっておられました。それを見て、鉢に水や食物を入れてさし上げ、お母さんが食物を口もとまでもっていかれると、火となって消えてしまいます。目連は、なんとかしてお母さんを助けたい、とお釈迦さまにおたずねになったら、お母さんの罪は重いので目連ひとりの力ではどうすることもできない、それを救うには、七月十五日、大勢のお坊さんが夏の修行を終える日に、先祖（七世の父母）のために百味飲食五果を供えてお坊さんに施しをし、その功德にすぎりなさい、といわれました。お坊さんは施主のために心をこめて先祖及び父母の成仏を念じました。すると、お母さんは逆さまに吊り下げられたような餓鬼の苦しみから、抜け出ることができた、といわれています。お盆は、七月に迎えるお盆、八月の月遅れのお盆と、それぞれ地方によって違いますが、十二日に草市（盆市）が立ち、精霊棚をかざる真菰、盆花、オガラやお供え物などを買い揃え、十三日に精霊棚をつくります。夕方には、ご先祖さまが、わが家に帰るのに道に迷わないようにと、お寺や墓地に、お墓参りをして盆提灯に火をつけてお迎えし、門や庭先で迎え火をたきます。お精霊さんは、馬に乗って少しでも早く来ていただき、牛に乗ってゆっくりお帰りになるという心配りのいい伝えから、キュウリやナスにオガラや割箸で足をつけ、トウモロコシの毛を尾につけて馬や牛をつくったり、カヤの葉やわらでつくった牛や馬もお供えすることもあります。お供え物は、季節の新鮮な野菜や果実を供えます。百味飲食といって、イモの葉やハスの葉の上に水の子（ナスとキュウリを小さく切って洗い米とまぜる）を供え、別の小鉢に水を入れてみそはぎの箸や櫛の小枝でお供え物に水をかけます。これはすべての有縁無縁の精霊に供養する意味です。地方によって十三日にお団子、十四日に餅やおはぎ、十五日にソーメンなどを供えたりしますが、故人の大好きだったものをお供えすればよいでしょう。お盆が終わる日（十五日か十六日）の夕方、送り火をたき、お浄土へ帰られるご先祖さまをお送りします。

特別連載

念佛者の心 (三)

奈良県香芝市 正福寺住職 別府 空由上人

法然上人の信仰

出家廿年を記念していささかの想を法然上人の信仰と題して述べる事にする。

一代の宗教者法然上人について考えるに、念仏の興行は愚老一期の勸化なりと示されるが如く、念仏をもって法然上人を語る以外にはないであろう。念仏口称三昧の行者として、浄土宗の宗祖として法然上人が語られるのである。

念仏は極楽浄土への「往生法」であり、極楽浄土は念仏三昧発得に依る自内証の境界である。

口称念仏三昧に依り発得されて、浄土の莊嚴を常の如く感じ得られた法然上人が大変にありがたい真実を示されている。この法然上人の示された真実の例を挙げるに、

我本因地 以念仏心 入無生忍 今於此界 撰念仏人 婦於浄土。

我もと因地に於いて念仏の心を以て無生忍に入り、今此界に於いて念仏の人を撰取して浄土に帰りに行かん。

因地とは自身の前世を覚証されたことを証すものなり、曰く、前世に口称念仏三昧に依りて無生忍を得て、極楽浄土に往生して阿弥陀仏のみもとに生まれて、その名を勢至菩薩といふ、極楽より、この娑婆に還相して、縁ある人をこの口称念仏三昧の法に依りて、前世の記憶を呼び起して、各人のふるき至極楽に帰り行かん、行き生まれる人も、帰り行く人も極楽に縁を結び保たんことを示したり、人間の生を娑婆に得たること、業の果報たる人間がこの緊縛より解脱することの大切さを成就されたる。ここに法然上人四十三才の立教開宗が示されるので

うらへ

ある。己の理智を持つて計ることを放棄して、縁ある仏・菩薩・諸賢・聖衆の導きに従うことの大切さのみが、我等の心を深きみ仏のお慈悲へと導いてくれるのである。理智の学僧法然房より慈悲の行者法然上人へと、因地の前世の宿願に立たれるのである。

そもそも人間が生きているということは、有漏の依身を持つて身に宿る靈性を開悟して三世に生き通される心に成長されることである。その為には学と行の二つを成就されなければならぬ。学とは釈尊の残された八万四千の法門を学ぶことを示し、行とはこの中の一門を持し行ずることに依つて深きみ仏の心、お慈悲に到達することをいふのである。門門不同八萬四といふことである。この八萬四千の中で景勝は、釈尊がみ心を示して第一とされるものは何であろうか、法然上人にとつては、それが口称念仏三昧である。ここに到る迄、立教開宗される迄には実に世寿四十三年の月日が費やされたのである。み仏の、釈迦のお慈悲にふれ、阿彌陀仏のお慈悲にふれ得たのである。我等は自分自身ではどうにも出来ない、はかり知れないもののお力添えに依つて生かされている。自分はどれ程のものでもない、どれ程のものでもない自分を自分たらしめて下される冥助の主に遇い感じ得られた時から信仰の人となるのである。身を

もつて礼拝せずにはおれない、心の回心を得る、神秘靈感妙なるものの実在を感じた時から信仰の人となるのである。法然上人四十三才、浄土宗開宗は法然上人信仰の人としての誕生である。所歸去行が定まつたといふことである。所歸去行の定まつた人の言葉なればこそ我本因地、以念仏心、入無生忍、今於此界、撰念仏人歸於浄土の歸と念仏と無生忍の三つが明確に示されるのである。法然上人の四儀不退念仏に日く、萬法自我心生放萬法印一心血自心生萬法萬法は自ずと我が心より生じるが故に、我が心より生ずるが故に即ち一心である。自心の牛ずるところ萬法が成り立つ。森羅万象は心から生じた、心の働きが六根六識六境として、存在した

いと発願したるが故に功德として生存するのである。万象(萬法)を内観してみるに自心の内に認められぬ出来事は何一つとしてないののである。法として存在するは、すべて自心の中に納め取れることは可能であり、想一つの一呼吸に押し計れる様になると、たやすいことである。森羅万象は功德に依り成り立っているものである。菩薩の誓願・功德に依る出来事である。この事は念仏三昧。定に入るに全て自心の内に納まり、自心の内より生じる出来事に他ならないのである。南無阿彌陀佛と申す内にこもり候うなり。この事である。これはこもつてもらされた法然上人の眞実であるから、こもつて領解する他にはないのである。

無量寿経に曰く、釈迦無勝浄土を捨て、此の穢土に出で給ふことは、本と浄土の教を説きて衆生を勧進して浄土に生ぜ令んが為なり、阿彌陀如来穢土を捨てて彼の浄土に出で給ふ事は、本と穢土の衆生を導て浄土に生ぜ令んが為なり、是れ即ち諸仏の浄土を出で穢土に出で給ふ本意なり、ここに浄土とは仏の国土を示す、果報に依つて構えられる仏の清浄なる国土を浄土という。阿彌陀仏の国土を極楽浄土といふのである。釈迦仏の国土を靈山浄土といふのである。浄土から非滅に滅を現る世界を此界とも穢土ともいふのである。浄土は果報に依つて生じるものである。明確に非滅(浄土)に滅(穢土)を現るといふことを受け止めなければならぬ。滅なるものが非滅なるものを勝ち得るためにこそ、我等衆生の浄土望郷の念を満たすものにこそ、我等衆生の浄土望郷の念を満たすものを明し浄土に帰り行きて示すこそ、浄土。稔土。浄土を明確たらしめることこそ諸仏出世の本懐である。この法を明かすことこそ諸仏出世の本懐である。ここに法然上人にとつて釈迦一代の教法を学問されて、念仏往生法を勝ち得たといふことが、釈迦出世の本懐こそ念仏往生法であると、穢土(此界)より極楽浄土に往く方法の念仏往生こそ、唯一の方法こそ阿彌陀の本願(念仏称えて我國へ来たれ、我迎うるに念仏こそよる

こばしきなり)と、釈迦入滅後その教に依りて修行にいそしみ、四聖諦・八聖道・六波羅密・七覺支・十二因縁・三十七道品等々、智を禪定に依りて、礼拝に依り、その他、数々の因縁に順じて行ぜられたる結果、菩薩の來迎に依りて小乗仏教から、大乘仏教へと進展して浄土の思想が法が完成されるのである。そして、それが日本に伝えられて、法然上人が知られて、ここに念仏往生法と極楽浄土が法然上人の中に明確になるのである。そこが南無阿彌陀仏にて往生するぞと思つ内にこもり候うなり。のこもり候なりを味わふ以外にはないのである。義浄は竜樹を「阿彌陀仏に同じ恒に浄土に居す。これ即ち化生の術」と示されている。この化生の術の中に我等の信仰を押し計る極楽の意が読み取れるのである。ここを法然上人は阿彌陀如来昔此界に於いて發心修行し給ふが故、此界衆生に於いて宿縁深き專一に非ず云々、次別宿縁とは、此界に於いて宿縁浅からず上に過去遠々の前凡夫、因位の昔、阿彌陀も此界に御す、我等も此土の衆生なるが故、往昔の古舊これ多し、生々の値遇一にあらず、或は父母親族ともなり、或は妻子眷屬となり世々所生の値遇結縁いくばく計哉と示し給ふ、要を執ると、阿彌陀如来、昔此界に於いて發心修行し給ふが故、此界衆生々々々の値遇結縁いくばくばかりか。このことをさとるが故に、念仏三昧無生忍に依りて実感せられしが故に、極楽は十萬億と聞きしかども遠からずして我が心中に在る眞実となられているのである。又法身報身心身の三身についても、法身とは是れ無相甚深の理なり、一切の諸法畢竟して空寂なるを即ち法身と名づく、報身とは別の物にあらず、彼の無相の妙理を解知して智慧を報身と名づく也、所知をば法身と名づけ能知をば報身と名づく也。

此の法報の功德法界に周遍せり、心身とは衆生を濟度せんが為に無際限の中に際限を示し、無功用的に功用を現じ給ふ也、と、かくの如くに法報の三身即一が明確に示され、念仏三昧發得に依れば自明の理なることを明されてい

るのである。又、特に觀經第七華座觀の中の「かくの如き蓮華は本これ法蔵比丘の願力の所成なり」を引いて彼の國の依報・正報の功德は皆これ彼の仏の願力所成の功德と断じられているのである。法然上人が口称念仏三昧往生の行者となられてからは、学ばれた学問である仏教が、いつかは知れず自心の中の出来事となられてゆくのである。自分のものとなれることが大切なのである。他人のものの受け売りや、物真似では、良いとは言えないが、仏教ということもなければならぬ大切なことであるから良としなければならぬであらう。

念仏信仰について特に我等に決め手となるのは阿彌陀經に依る、この事は法然上人の阿彌陀經を讀めば良い。

法然上人の教えの眞に迫るのは南無阿彌陀佛と申す内にこもり候うなりのこもり候うところを行ずる以外にはないのである。

結局他人ではなく自分自身が行じてすすみゆくことこそ大切なのである。知りたくば、会いたくば心にかけて念じ給え、そは南無阿彌陀佛の六字の名號なり。

右、いささかの我が心の内を明し、照らし合わずに法然上人のまことを鏡として用い、これを支えとして精進求道にいそしみたいと念じる次第である。

平成三年正月、出家廿年を記念しての出来事である。

つづく